外房　法友会

法政大学校友連合会
外房支部会報
第　７　号
発行所　法政大学校友連合会外房支部
発行人　渡邉光夫
〒297-0016　茂原市木崎118-27
TEL　0475-22-5215

『外房』支部誕生

法政大学校友連合会茂原支部は、この度、新たな歩みを始めます。

今日まで、茂原市及び長生郡在住の校友を会員として活動して来ましたが、新たに、勝浦市、いすみ市及び夷隅郡の校友も加わり、名称も

法政大学校友連合会外房支部
外房法友会

となり、活動を始めます。（正式には十月二日の総会にて決定）

まず、ここまでの経過を説明します。

昨年の茂原支部総会に太田洋いすみ市長（昭和四十七年卒）はじめとする夷隅地区在住の校友数人の参加をいただきました。その席で改めて感じたことは、長生・夷隅地区というのは、日々の暮らしの中では全く一つの生活圏であるということでした。両地区在住の校友が一つになって活動出来たらどんなにすばらしいことかというのが参加者全員の一致した思いでした。

今年に入り、五月に「準備委員会」を立ち上げ、数回にわたり委員会を開催し協議を重ねた結果、新支部発会の運びとなりました。

今後は、今まで以上に支部を活性化し、校友の親睦を図る活動をしていきたいと思います。

十月二日の総会には一人でも多くの校友に参加いただき、法政の卒業生であることの絆を深めたいと思います。

今後とも、外房法友会に対しましてご支援いただきますようお願いいたします。

新支部設立準備委員

氏名	卒業年	学部	住所
渡辺　光夫	1957	経	茂原市
秋葉　豊稔	1964	社	茂原市
佐久間　武	1964	法	茂原市
日良　俊徳	1971	法	いすみ市
古山　弘	1974	工	睦沢町
今井　富雄	1976	法	睦沢町
渡辺　康志	1979	工	いすみ市
野口　一展	1981	法	いすみ市

ニュース

昨年十一月に行われたいすみ市長選挙において、太田洋氏が見事再選を果たしました。太田氏は、法政大学の卒業生であり、支部としても全面的に応援いたしました。今後ますますのご活躍を期待したいとおもいます。

俳句歴五十年

渡辺光夫

俳句を作り出して約五十年になる。よくまあ飽きもせずに！　熱く燃え嵌った時、まったく俳句どころではない時、もあった。それでも細々となんとか続けて今日に至っている。

平成七年教員生活定年退職前、退職後ゆっくり時間を掛けて俳句集を出版しようと思っていた。友人から出版するなら、現職の今のうちが花だよ、と奨められた。それで夏休み一ヶ月かけて、約三十年間の分を編集し、なんとか退職前に間にあわせる事が出来た。千葉県教育功労者賞受賞と句集「みそさざい」出版記念を兼ねて高校関係者等盛大に祝賀会を開いて頂いた。

ところで俳句歴ですが高校二年生の時から細々と続ける。読売俳壇、朝日俳壇等新聞俳壇、ホトトギス、玉藻、若葉等結社へ投句。それらの中から六百句ばかり選んで、俳句集「みそさざい」B６判二百十頁函入りで出版した。本の題名「みそさざい」は初めて作って活字になった「早春の村静かなりみそさざい」に由来する。

句集に納められている思い出深い句として次のようなものがある。「流れ星消えて夜闇の拡がりぬ」「行水に流せば今日の過去なりき」「利根の霧手賀の霧とて灯を濡らし」「赤蜻蛉飛び去りもとの棒となる」。高校教員となってから、「朝顔に棚作りやり転居する」「釣れてよし釣れぬもまたよし鮒を釣る」「馬追のところ移して音色澄む」「五月野にあるものなべて光り合う」「余り苗束ねられぬしまま育つ」「支えられてなお向日葵の背を伸ばす」「虫の碑に昔の暮し偲びをり」「鐘撞いて春愁の心癒すなり」「秋思ふと月の砂漠の像を撫づ」「松の花潮寂しるき普羅の句碑」「手花火の終のあがきとして光る」。

平成八年退職以後もいろいろな仕事を引き受けて却って忙しくなった。それでも俳句関係の事は続けている。長生郡市にある句碑を調べ「長生郡市の句碑散歩」、俳人たちの個人句集のダイジェスト「俳句集ダイジェスト」、俳人前田普羅を調べ「前田普羅論」、俳諧人「白井鳥酔論」をそれぞれ小冊子として発行した。その四冊を一冊にまとめて出版したいと思っている。句集「みそさざい」出版以後の俳句も相当な数になったので、それもなんとかまとめたいと思っている。

「国際啄木学会」会員、俳句の事ばかりやっていても、経済学部経済学科山本ゼミ卒業生。「句碑散歩」「前田普羅論」「白井鳥酔論」は歴史であるから、経済史山本先生の学恩に少しは報いられた、と自負している。

（昭年三十二年・経卒）

いすみ市岬町和泉　昭和堰

外房法友会設立おめでとうございます

秋葉豊稔

（昭和３９年社卒）

茂原市法目

損害保険ジャパン代理店
損保ジャパンひまわり生命保険代理店

中村保険サービス

中村良逸（昭和４４年経卒）

茂原市高師392
TEL　0475-22-2853

日本人必読の文学

佐久間武

昨年の１１月下旬から、司馬遼太郎の『坂の上の雲』がＮＨＫで放映された。それに先立ち、文芸春秋から「坂の上の雲」と司馬遼太郎の１２月臨時増刊号が発行された。

その増刊号の中で、鳥海東大名誉教授は、

「明治時代の日本は、列強の東アジアへの進出の激化に直面して、一歩誤ればこれに飲み込まれ兼ねないという強烈な対外意識と、国家の独立を維持・強化し、国際社会の中で欧米列強と対抗し得る富強な国家を建設するという国家目標を人々が共有しつつ、懸命に国づくりを進めた時代だと思っている」と。

このような国際情勢の中、日露戦争を描いた『坂の上の雲』の中には、「苦闘する明治人」が多々登場し、「皇国の興廃、コノ一戦に在リ」の精神がみなぎり、不屈不撓で戦い続けた場面が数々描写されている。

ところで、ここ数百年、世界に君臨したのは白人国家である。なぜ、白人国家が世界に君臨できたのか。ヨーロッパ諸国は、強力な大国の出現がなかった為、常に勝ったり負けたりして、『多くの戦争が生じた』からである。他の地域のでは、「オスマントルコ」、インドの「ムガール帝国」、隣の「民国」「清国」などの大国の出現により、その大国に歯向かう国は少なく、戦争は少なかった。

多くの戦争は、その地域の国家を諸々の点で進歩発展させ、他の地域の国家より優位に立たせ、優位に立った国家が世界を植民地にして君臨し続けたのである。

その世界に君臨し続けた白人国家を、世界の歴史上、初めて破ったのが日本である。現在の日本が存在しているのも、日露戦争に勝利したからである。

同じ増刊号で、渡辺昇一上智大学名誉教授は、「坂の上の雲」を「日本人必読の文学」と書いている。

私も、日露戦争を描いた「坂の上の雲」は、正に「日本人必読の文学」であると思う。

ぜひ一度お読み頂きたいと思います。

（昭和三十九年・法卒）

東京マラソン疾風禄

成嶋まさる

学生時代から３０年近く過ぎ、体重も１５kg増えてしまった。近年はメタボとかなんとかうるさい。３０年前に今の体型で飲みに行ったら、お金持ちに見えてモテたかもしれないが、近年は飲みにいっても、「お酒薄くしましょうか？」と、なんか憐れんで言われてしまう。少し、スポーツでもしてみるかと思ったが、ゴルフをするにも金がなく、野球をするにも友達がいない。金がなく、友達がいなくてもできるスポーツといえば、マラソンと言うことになり、練習を始めた。

まずは、家の近所を走ってみる。今まで気がつかなったが意外と高齢者がウォーキングをしている。ウォーキングしている高齢者を軽く追いぬこうとするが、意外に速く、なかなか追いぬけない。あまり必死になって追いぬくのも恥ずかしいのでコースを変えてみる。しばらくして、茂原公園でも少し走ってみた。高校生も部活で走っている。高校生なら追いぬけなくても恥ずかしくなく、気軽に走れる。最近の高校生はしつけがよく、見知らぬ中高年の私にも、「こんにちわ」とあいさつしてくれる。なんだが自分もスポーツマンになったような気がして気分がよい。３０分くらい走ってから家に帰り、シャワーをあびて、ビールを飲むと、いや〜うまい。もう１本。

練習し始めて１〜２年たち、マラソン大会に出てみようかなと考えるようになった。マラソンをしない人には信じられないと思うが、近頃はマラソンがブームで、特に人気の高い東京マラソンは参加希望者が多く、抽選で当たらないと参加できない。もちろん、参加料金もとる。東京マラソンに当たる確率は約８倍なので、たぶん落ちるだろうが、落ちたら、「いや〜、走る気はあったんだけどね。落選したらしょうがない。」と言えるし

、話のタネになるかなと思って申し込んでみた。

そしたら、なんと当たってしまった。

２０１０年２月２８日（日）小雨、スタート地点の新宿都庁周辺は人であふれている。東京マラソンは参加者３万２千人で、制限時間が７時間。途中、数か所関門があり、決められた時間内にその関門を通過しないと、失格になってしまい、そこからはバスに乗ってゴールに向かうことになる。一番きつい関門が３５km関門で、ここは５時間３２分までに走りぬけないと失格になる。とは言っても、東京マラソンは、国内では一番制限時間が緩い大会と言われており、それが人気の高い理由の一つでもある。

私は、スタート４０分前に集合場所に到着したが、人が多く、身動きできない。だんだん雨が強くなってくる。ゼッケンをつけた老若男女が、雨に濡れながら身動きもせず待っている。まるで難民キャンプのようだ。しばらくして、ようやくスタートするが、人が多すぎてなかなか走り出せない。私がスタート地点を超えたのは、スタート時間から２０分経過していた。新宿を抜け、最初の関門が５kmの飯田橋付近。時間は余裕。法政タワーも見える。しかし、雨に降られ寒く、トイレに行きたくなる。我慢も体に悪いだろうとトイレに並び、５分ロスする。その後、品川で１５km関門を越える。関門を越えると、ホッと一息ついて、トイレに行きたくなる。　考えることはみんな一緒で、ここでも１０分くらい並んだ。だんだん制限時間が気になってくる。銀座を抜けて浅草に向かう。ここでは、すでに浅草を折り返した速いグループとすれ違う。同じランナーとは思えない速い足取り。ああいう人はトイレに並ばないのかなと思う。雨がみぞれに変わり、だんだんお腹もすいてくる。給水所ではバナナも用意してあったようだが、すでに売り切れで、私のように遅いランナーは、食べることはできない。マラソンの世界も厳しいのだ。寒さのせいか、とうとう右ふくらはぎがつり、我慢して走っていると、今度は左足もつり、こりゃだめかなと思いつつ、走り続けていると痛みがなんとか和らいだ。このとき、３５kmの関門が遠くに見えた。ここをクリアできれば、なんとか完走も見えてくる。制限時間は残り３分弱。走っても、走っても、なかなか関門が近くならない。係員が残り２分ですと、遠くから叫んでいる。私は走る。係員が関門を閉めようとロープを持って、あと１分ですとアナウンスしている。５０年以上生きてきて、一番走ったのがこのときかもしれない。制限時間残り４０秒で関門をクリアでき、思わずガッツポーズが出た。最大の関門を越えても、ゴールまでは遠く、今度は膝やくるぶしが悲鳴を上げてきた。息は余裕あるのだが、足が一足ごとに痛い。

結局、ゴールしたのは、制限時間３分前の６時間５７分。

今、２０１１年の東京マラソンに申し込むかどうかは思案中です。

なお、体重は全然、減ってません。

（昭和五十七年・法卒）

（ゴール後、完走のメダルを持って）

学生時代

目良俊徳

昨年度退職し、現在はいわば悠々自適の生活を送っている毎日である。

先日、法政大学校友連合会茂原支部から夷隅地区も一緒なって合同支部として新しく支部を設置しようとのお話があり、その打合せ会に招かれた。そこで、この度の投稿を依頼されてしまった。内容は何でもよいとのことでしたので、約四十年ぶりに大学時代を振り返ってみることにした。正直遠い過去の事、苦い思い出ばかりであまり思い出したくないが挑戦することにした。

昭和四十二年、大学に入学し、あこがれの東京生活が始まった。おのぼりさんの私は大学や都会生活に慣れるのに時間が懸かった記憶がある。

私たちの学生時代は、七十年安保闘争のまっただ中、混乱の時代であった。

それでも、一年生の一年間は、学生運動家等の活動はときおり門や正面玄関、学生ホールなどでのビラ配りやアジ演説が行われる程度で概ね落ち着いた学生生活であったと思う。今思えばこの一年間だけが、四年間の学生時代の中で貴重で有意義な時間を多く持てた時であった。

初めて受ける大学の授業は、マンモス教室でのマイクの講義が多くてやや辟易した。同好会は西語クラブを選択した。昼休み空教室での活動は、将来への夢を語る充実した時間であった。友人がふえる中で授業はもちろん遊びやアルバイト、そしてテスト対策などで共に楽しく過ごしたことが思い出される。

また、神宮の六大学野球はよく応援にいったものだ。当時の法政大学野球部は、打者では田淵・山本・富田・鶴岡、投手では山中などの優れた選手が輩出し、四年間の八シーズン中六シーズン（？）優勝し、優勝の喜びの価値を忘れるくらいであった。

こんな平穏な時間が覆ったのは、二年生になってからの大学紛争であった。

当時、学生運動は社会党など左翼系の政党活動や総評等の組合労働運動の影響をもろに受け、日に日にタテカン（立て看板）が大きくなり、文字は大きくゆがみ始めた。

さらに、マイクを使ったアジ演説は、がなり声となりキャンパスじゅうに鳴り響いた。そして、遂には大学当局と対峙する日大闘争などの大学紛争にみられたようにその波は全国に広がっていった。

民青、中核、革マル、社青同、三派連合等の活動家グループが大手を振って大学を闊歩していた。法政大学でも一般の学生が学生ホールで寛いでいるときや授業中にも抗争中の活動家同士が鉄パイプをもってなだれ込んできて互いに罵りあい殴り合うなどの場面に私自身何度も遭遇した。また、ヒヨリミ（日和見学生）が軽蔑の的となり、各団体や全ての学生に対して「自己批判」が求められ、政治的な意味をもった何らかの主張や行動をとらざるをえないようないやな雰囲気が大学・学生の間に席巻していった。

そんな中、「ロック・アウト」とよばれる闘争形態が各大学で広がり、法政大学でも同様の状態が起きてしまった。大学は開店休業状態となり、学生は大学には入れるが授業が行われない日が続き、結果として、定期テストの代わりに多くの教科がレポート提出をもって単位修得となる措置が執られたと思う。

今となって見れば、「ロック・アウト」は、多くの学生から学ぶ機会・権利を奪った犯罪ともいえる行為であったと思う。心ある学生ならどんな状況でも自分で課題をもち学んでいたことであろう。が、私は、極めて凡人であったためか、大学のこの状態にかまけて大いに遊んでしまった。・・・猛省。

三年生の後期になると大学紛争も沈静化の方向に動きだし、大学も落ち着きを取り戻した。気がつくと、仲間は、すでに「就職活動」を始めており、私自身少し焦りを感じた記憶が残っている。幸いにも当時日本は高度経済成長のまっただ中にあり、学生が就職先を十分選択できる時代であった。そのためか、成績のあまり良くない私も運のよい仲間（？）と一緒に卒業することができた。

卒業式は、入学式と同様日本武道館であった。

（昭和四十六年・法卒）

「せんだん」という木

今井富雄

私は、四月から茂原小学校に勤務しています。昨年は、白子町の白潟小学校に勤務していたので、白潟小学校の『日本一の野菜づくり』について寄稿させていただきました。九月に行った地区運動会の打ち合わせ後のことだったと記憶していますが、地元の自治会長さんから「校長先生は法政の出身ですか。（息子さんが、法政大学の卒業生ということで）校長さんの記事を読ませていただきましたよ。」と声をかけていただきました。大変身近に大学の仲間がいらっしゃり、会報を読んでくださっていただけたのだと、うれしくなりました、仲間が近くにいることで、学校経営にも百万の味方を得た思いがし、心強く感じました。さらに、二ヵ月も経たない頃でした、本納小学校に勤務した頃の教え子のお母さんから「私も法政の卒業生ですよ。」ということをお聞きしました。奇遇とも思える二つの話は、この会報が取り持ってくれたものでした。今回、また会報に寄稿させていただけますので、現在の勤務校のことについてお話したいと思います。

茂原小学校は、百三十七年の歴史をもつ学校です。せんだんの古木が校庭を囲み、子どもたちを見つめ続け、今夏の猛暑にも涼しい緑陰を与えてくれています。このせんだんの木の一本（玄関脇の木）は、本校のシンボルツリーとして力強く大地に根を張り、幹周り約二メートル五十センチの太さを誇っています。夏休みに入り学校に来た子どもとそのお母さんに手伝っていただき、一緒に手をつないで幹周りを計測しました。わずかの時間ですが、何かほのぼのとした温かいものを感じました。

さて、私は、この校庭を囲んだ「せんだんの木々」は、何年を経た木々であるのか知りたくなりました。『創立九十周年記念誌』にその資料を見つけることができました。大正三年三月に本校を卒業され、大正十年から昭和十年まで本校に勤務された石岡信夫先生の書かれた回顧録の中にありました。それによりますと、『せんだん植樹は、天狗巣病で枯れてしまった染井吉野や中央校舎前の槙の木の数本と、それに並んでいる他の木のほとんどと共に、五十年程の昔、私が茂小の高等科二年生の時、大方は放課後に作業し・・・。（略）校長、担任の先生指図の下に、私達生徒は、着物の裾をはしょり、跣（はだし）で石ころ道を、荷車を引いたり、押したりして運び、校庭のそれぞれの場所に植えました。（以下略）』

これにより、当時の校長名や石岡先生の記述から、およそ九十八年前の老木と推定されます。植樹の苦労も読み取れますが、当時の皆さんのお蔭で、今の茂原小学校の緑が保たれ、校歌の三番に「せんだん　せんだん　光を浴びて　鳥が飛び立つ　若葉が茂る身もすこやかに　未来の夢を描くゆりかご　楽しい母校」と歌い引き継がれているのです。

（昭和五十一年・法卒）

会に対するご意見・ご要望等があれば下記までご連絡下さい

連　絡　先

299-4415 睦沢町小滝 475-1

㈱三陽測量設計内　古山弘

TEL　0475-44-1869

FAX　0475-44-1959

Eメール - h.furuyama@sanyou.sakura.ne.jp

学生時代を思う

野口一展

大学を卒業し、早三十年の月日が経とうとしている。卒業後は全くと言っていいほど法政大学に関わることがなかった私だが、昨年高校時代の恩師でもある渡邉光夫先生から校友会の総会があるからぜひ出席をとのお誘いを受け、出席したのが校友会との関わりの始まりである。

私は住まいがいすみ市であるため、校友会茂原支部の存在すら知らなかったのであるが、出席してみると多くの先輩方が集まり、昔話に花を咲かせるとともに、現状を憂い、校友会茂原支部を夷隅地区も巻き込んだ会に発展させようとしている姿に感銘を受けた。今後は、夷隅地区の卒業生にもこの会の存在を知らしめるために、少しでも力になれればと思っている。

さて、私が入学した昭和五十二年はすでに学生運動もおさまり、軟派な大学生活を謳歌する学生がほとんどであった。私は中学・高校時代にやっていた剣道の同好会に入り、学業と運動を両立した楽しい学生生活にするつもりであった。ところが入ってしまってからわかったのだが、同好会といっても上下関係も厳しく、普段は学ラン着用というものであった。その上、学団連の中枢を担い、学園祭の警備などやらされ、剣道の愛好会というような生やさしいものではないと気がついたときには、もう遅かった。応援団や他の武道系の団体とも交流が深く、一・二年の頃は学ラン姿の先輩を見つけると十メートル以上手前から「ちわー」の挨拶をし、その先輩が通り過ぎるまで直立不動でいたのを今でも思い出す。「先輩の声は天の声」のもと無理難題もずいぶんとやらされた。三・四年は逆に幹部と呼ばれ、いい思いをすることが多かった。学生会館の喫茶店の運営を任され、学園祭ではメインの場所に出店を出し、随分と儲けた記憶がある。いい思いをするためには、下積みも必要なのだということを身をもって体験することができた。

このような学生生活を過ごし、卒業後は教職の道に進み、中学校の教員として生徒の指導に長く携わってきた。現在は教頭という立場で生徒の指導よりも、職員をまとめるに腐心している。若い先生方の多くは、学生時代に苦労した経験が少なく、少しの困難にも悩んだりする人が多い。その意味で私のように望んだのではないが、法政での苦労は私の人生において大きな財産となったと思っている。

（昭年五十六年・法卒）

測量設計全般・土地建物登記

株式会社三陽測量設計

古山弘（昭和４９年工卒）

長生郡睦沢町小滝 475-1
TEL 0475-44-1869

広　告　募　集

１枠三千円です。ぜひご協力を

申し込みは６面の《連絡先》古山まで

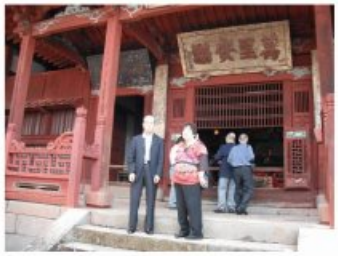
法政大学全国卒業生の集いに参加して

平川忠勝

法政大学全国卒業生の集い全国大会は今年で十八回目を迎えますが、私は八回目（平成十一年）の札幌大会から参加しています。

札幌大会の時は、昭和六十二年三月まで札幌で勤務していましたので、自分の庭みたいと思ったのですが町並みが変わってしまい、少し手惑いましたが、札幌ビール園等は変わらない風景でしたのですべて歩いて行動しました。ビール園でバス旅行の人たちとの懇親会が行われましたが、八戸の夫婦と親しくなり、今でもお付き合いしています。九回（平成十二年）は山梨県の甲府で開催されましたが、新宿から特急で行きましたが、全国大会に行く人たちが何人か乗車していましたが、確か新潟市議の方が一緒の座席に座っていまして懇親会の時に色々お話したりしましたが、仕事が忙しそうで次の日ゆっくり出来ないと話しておりました。十回（平成十三年）は山口県宇部市で開催されましたがこのときは夫婦で参加しましたが、この年はアメリカでテロがあった年で飛行機が無事宇部空港に着陸した時は皆歓声を上げていましたし、懇親会のときに席が近かった人に夫婦で誘われて宇部の町を夜遅くまで付き合いましたし、翌日は団体バスで広島まで行き広島原爆記念館を見たときには悲惨さで目を覆っていました。十一回（平成十四年）は宮城県仙台市で次の日の観光で蔵王のお釜が少し見え始めたところでバスの発車時間となり、残念な気持ちになりましたが、今度夫婦で来たいと思いました十二回（平成十五年）の開催地は福岡市でしたが、久しぶりに夜行寝台で行きまして、次の日の朝駅前のサウナで休憩しましたが、一人で入ったのは初めてでしたので興味津々でした。この時は何処も見学せずに次の日新幹線で帰りましたが、仕事柄駅員等に注目していました。十三回（平成十六年）は横浜で開催され、夫婦で参加し夜の船の観光でしたが、このときは仙台の夫婦と仲良くなりまして今でも毎年参加しようねと連絡取り合っています。十四回（平成十八年）は沖縄県で開催されましたが非常に気温が上がっていまして、すぐに汗が吹き出るほどでしたが、この年は一人で参加でしたが、次の日団体バスの時間を間違えまして気がついたらもう三十分も前に発車してしまい、一人で防空壕の中を見学しましたが広島の原爆記念館とダブってしまい戦争の悲惨さを改めて認識しました。十五回（平成十九年）は大阪で開催されましたが、会場は何処も素晴らしいですが、次の日ユニバサールジャパンを見学しましたが、入場して二十分位したら体の具合が悪くなり、すぐに退場して新幹線で帰って来たという思い出が有ります。十六回（平成二十年）は愛媛県松山で開催されまして、道後温泉に入浴しました最高と大声出したかったですし、松山城で二人の案内人と一緒に記念写真を撮ってもらいましたが、もう一度今度は夫婦で来たい観光地でした。十七回（平成二十一年）は長崎県長崎市で開催されましたが、この時の申し込みは私たち夫婦が一番早かったと思います。結婚して三十五　年新婚旅行で長崎だけはどうしても行けなかった場所で当時は知らなかったですが〈おくんち〉という祭りは日本でも有数な祭りで有る事がわかりましたがじっくりと長崎の街を堪能してきました。夫婦で参加したのは今までに三回しか有りませんがこれからは毎年夫婦で参加し、色々な人たちと友達になり、友好を深め合って行こうと思っています。

（平成五年・経卒）



写真（上）長崎にて奥様と
（左）松山にてガイドと

編集後記

まだまだ残暑きびしい日が続きそうです。校友の皆様におかれましては健康に留意しご活躍されますよう祈念いたします。

（古山）